

## 庾信の絶句体詩における文学意識の転換

矢島，徹輔

<https://doi.org/10.15017/2332795>

---

出版情報：文學研究. 65, pp.127-151, 1968-03-30. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 庾信の絶句体詩における文学意識の転換

矢 島 徹 輔

## 序

六朝末期の最も代表的な詩人である庾信（字は子山）の詩は四部双刊本『庾子山集』によれば、二百三十四首（但し、『玉台新詠』には、四部双刊本に記載しない、「七夕」の詩一首がある）が現存している。そして、これらの詩の中で近体絶句と同じ形式をとるものが五十八首（七言を三首含む）もあり、彼の全詩のおよそ四分の一を占めている。これは決して少ない数ではない。

絶句体の詩が、いったいどうして起ってきたのか、その起源を明確に求めることは現在ほぼ不可能に近いであろうが、一般的には、六朝末に至って、それまで江南地方で流行していたこの形式の民歌が、南朝文人の手に取り上げられ、はじめて詩の一ジャンルとして認められたものと考えられている。そして、この四句よりなる短詩形の詩は、特に梁朝において大量に作られたのであるが、それを内容的に見ると、詠物の詩がその大半を占めている。この現象に、われわれはまず注目してよいであろう。ところで、このように梁代において詠物詩が盛行したのは、南北朝という、片時として消えることのなかった長い兵火の狼煙の中にあつて、わずか半世紀ほどとは

いえ、梁の武帝によって招来された平和な治世の時期に、人心は安らぎ、経済は著しく発展し、特に宮廷内部には、絢爛豪華な奢侈生活がもたらされ、そうした華やかな雰囲気の中から、王侯貴族を中心とした文学集団が結成され、その集団において、特にこの詠物詩が、独自の文学的価値を与えられたからにほかならない。つまり詠物詩とは、梁代の宮廷サロンにおける優雅な文学遊戯の玩物であったのである。ところが、このような遊戯的な当時の絶句体の傾向に対して、庾信の同形式の作品には、人間の心情をゆさぶるような情感が、強い底流として生きいきと脈うっている。ということは、元来、遊戯の手段として隆盛を極めた絶句体の詩が、庾信によって内面的に掘り下げられ、文学的飛躍がはかられたことを意味する。

云いかえるならば、客観的な視野に立って事物を描写するという詠物詩は、常に修辭を眼目とする華やかな没個性的作品にすぎなかったが、その没個性的なものを、詩が本来的な使命とする個性的なものへと転換させ高揚させたのが、まさに庾信であったといえる。彼は、当時の類型化した文学から脱却して、みずからの境遇に即した、みずからの心をこそ詠む文学に没入したのであり、そしてそれは、来たるべき唐代の近体詩成立の端緒をひらくものであった。そうした意味で庾信の絶句体の詩は、特に注目に値すべき意義があると思われる。それでは、彼が、サロン文学における玩物に過ぎなかった絶句体の詩を、より高次な、文学性豊かなものへと転換せしめ得たのは、いったいどんな機縁によるのであろうか。その要因を探ろうとするのが、この小論のめざすところである。

梁代に入ってから、この絶句体の詩は、例えば、武帝に四十一首、簡文帝に六十七首、元帝に三十三首、宣帝に八首、沈約に二十六首、庾肩吾に十五首、吳均に二十首、何遜に十五首、劉孝綽に十一首、劉孝儀に五首、劉孝威に十二首、范雲に十五首といったふうに、武帝を始めとした梁朝の皇帝たち、およびそれを中心にして集まり、サロン文学集団の構成要員として活躍した文人達によって、急に数多く作られはじめた。

それでは、どうしてこの絶句体の詩が、かくも宮廷詩人たちにもてはやされたのであろうか。

まず絶句体の詩のもとになった「呉声歌曲」については、郭茂倩の『樂府詩集』（巻四十四）に、

『晋書』樂志に曰く、「呉歌雜曲は、竝びに江南に出づ。東晋以来、稍しだに増広有り」と。その始め皆徒歌するも、すでにしてこれに管絃を被ふ。けだし永嘉渡江より後、下は梁陳に及ぶまで、咸く建業に都し、呉声歌曲、此に起る。

という。これは、東晋以来江南に起こった民間歌謡である呉声歌曲が、梁陳の時代までの間に、都建業を中心に盛んに流行したことを述べるものである。また、同じく絶句体のもととされる「西曲」は、『樂府詩集』（巻四十七）に、

按ずるに、西曲歌は、荆郢樊鄧の間に出で、その声節送和、呉歌と亦た異なる。

といわれるように、荆楚地方に流行した民歌である。この「呉声歌曲」や「西曲」と称される南方の民歌は、形式面から見ると、絶句体の詩形をとるものがその大半を占める。また内容から見ると、専ら男女間の纏綿たる愛

情の世界を主として詠う。この男女の情を専らとする南方民歌の艶麗さこそが、梁朝の宮廷文人たちの風気に適合し、彼らによって取り上げられた結果、これらの歌曲は隆盛を極めることになったのであろう。

それでは、かくも民歌を吸い上げていった梁朝の風気とは、どのようなものであったろうか。序で述べたように、梁の武帝による平和な治世は、江南地方の経済力を著しく発展させ、長江流域のデルタ地帯には豊かな産物が実のり、商業もまた繁栄を謳歌していた。そして、この繁栄を決定的にしたものは、武帝のすぐれた貨幣経済政策であった。この政策によってもたらされた貨幣の流通によって、官僚・商人たちはそれぞれ豊かな資力をたくわえることができ、その結果、山紫水明の自然の中にはぐくまれた南方人生来の情熱的な性格とあいまって、町に流行する艶やかな歌舞に耽溺したであろうことは想像に難くない。また一方、南朝全般を通じて、宮廷の内には権力闘争がうちつづき、そのために宋の謝靈運・鮑照・齊の謝朓・王融など、多くの文人達が犠牲となった。こうした厳しい情勢の下では、文人はそれぞれ政治への参与を避け、ひたすら宴遊の享楽に己れを埋没させざるを得なかったであろうし、そうした享楽への積極的参加は、そのまま彼らの保身の手段でもあった。こうして、一般士大夫階級である文人たちは、頽廢享楽の虚しき人生観を抱きながら、声色を求めてさまよい、自ら破滅の道程をたどったのである。梁の魚弘が、「丈夫世に生くると、輕塵の弱草に栖み、白駒の隙を過ぐるが如し。平生但だ懽樂せよ、富貴は幾何の時ぞや。」といつて、思いきり遊びまわった『梁書』二十八、魚弘伝」という話は、この間の実状を示すものであり、貴族文人たちの奢侈生活への耽溺は、当時における一般的風潮となっていたのである。こうした梁代の頽廢の気風に適合して、巷に流行していた情歌艶曲が、宮廷に取り上げられ、そこに群がり集まる文人たちの手によって洗練され、その艶麗な情趣はますます磨かれていったと考えられる。

かくして、元來民間に端を發した絶句体の詩は、宮廷においてその隆盛を見るのである。

さて、民歌の影響を受けて流行した艶でやかな絶句体の詩は、おおむねその民歌の題（樂府題）をつけて、王侯貴族をはじめ、多くの文人等に作られるようになるのであるが、ここで問題とすべき点は、序において指摘したように、「詠——」と種々の事柄や物品を題材とする詠物詩が非常に多いということである。<sup>(1)</sup>例えば、武帝の絶句体の詩十一首のうち四首、簡文帝四十九首のうち三十五首、元帝二十三首のうち二十首、宣帝八首のうち八首、沈約二十一首のうち十七首、庾肩吾十四首のうち十三首、劉孝綽十一首のうち九首、劉孝儀五首のうち五首、劉孝威十一首のうち九首、范雲十五首のうち九首が、それぞれそうした詠物詩で占められているといったふうに。では、なぜ詠物詩がこれほどまでに文人達に多作されたのであろうか。その理由について、次に述べてみよう。詠物詩發生の要因として、小尾郊一氏は、「山水詩が普及するにしたがつて、王侯貴族の自然美の觀賞が、幽邃な山水の境地から、齊梁間に盛んに造られた広大な庭園内の山水の風致に及び、その対象は著しく日常性を帯び、かくて範圍が自己の周辺の自然美の發見に狭ばまれてくると、いきおい細密な描写への志向が、全体的な情緒の構成に主眼をおく山水詩では満足できなくなり、自己の周辺に新しい素材、草木・鳥獸・器物を対象にする詠物詩の發生をうながすことになる」といわれる。これはこれとして正しいと思われるが、さらに補足していうなれば、前述したように、江南地方における貨幣經濟の發展と、政治に背をむけた貴族階級の生活態度とからする、奢侈生活における遊戯の手段として用いられるようになっていったとも考えられる。そして、そうした遊戯的性格を示すものとして、「賦得——・和——」という詩題が非常に多いことが注目される。かくして王侯を中心とした宮廷、あるいは文人社交の場で、指定された題材などについて互に文辭の巧をこらし合ったり、作詩

の速さを競ったりして、多くの文人達は才を尽くして互に巧緻を争ったりしたのであった。ところで、狭められた文学的視野の中で、王侯貴族たちの巧緻をもてあそんだ詠物詩の大半が、絶句体の形式によっているという事実は、彼等の慣れ親しんでいる民間歌謡の五言四句の形式が、創作にも簡易であり、かつ我が国でいう歌合せ的な遊戯に適したものであったことを示している。彼らの手になる絶句体の詩は、あくまでも文人会合の席上における遊戯的手段の文学として、民歌の形式を採用していったにすぎない。従って、そこには纏綿たる情緒の流露は望み得べくもなく、常に観念的意識の範囲に限られて、深遠な深みを持つ高尚な文学とは程遠いものであった。このような当時の風潮に対して、庾信の絶句体の詩は、類型化した文学観から、孤高の文学観へと変化していく過程の作品が多い。例えば、「寄徐陵」とか「寄王琳」という作においては、友人に託しながら己れの切々とした哀感を述べ、「和侃法師三絶」、「重別周尙書一首」においては、故郷である江南の地に帰り行く友を見送りながら、その古里への耐えがたき思慕を詠っているのが、それである。これらの作には、すでに遊戯的性格は地をばらい、作者自身のせつない心情こそが溢れるばかりに吐露されている。

元来、詠物詩は、常に客観的に対象を描写するものだから、詩それ自体は非常に浅薄な写生的作品になる。従って、南朝における詠物詩には、近体詩として確立した唐詩のもつ余情・余韻という、より精神的な境地を詠みこもうとする意識は認められない。また対象を擬人化して作者の思想を投影するという面さえも少なく、専ら対象それ自体を冷静な眼で眺めようとするものであり、言辞の技巧を中心とした即物的なものであった。洗練された辞句の美は認められても、詩の個性美を喪失したもので、文学的魅力に乏しいものであった。ところがこれに反して、庾信の詩は、南朝のかかる風氣に染まる部分をいまだ多少は宿しながらも、確実に、唐詩につながる詩

風へと、文学的な飛躍をとげたものといえる。

## 二

では、庾信のこうした詩風上の変化は、どのような要因によってもたらされたものであろうか。それを考えるには、まず彼のおかれた環境を考えてみる必要がある。

彼の生涯は、彼が華やかな宮廷サロン文学集団の文人としてその才を揮った南朝における前半生と、それと全く対照的な北朝における後半生との、前後二時期に分けることができる。そしてこの前後の対照的な生涯が、彼の文学観に著しい相異をもたらす原因となったように思われる。

侯景の乱によって都建康が陥落し、その混乱の中でよく軍を整え、侯景を撃破した湘東王繹が江陵で即位して元帝となるや、まもなくその元帝の命を奉じて庾信は西魏の都長安に使用する。時に承聖三年（五五四）、四十二才であった。ところが、彼が長安に滞在している間に西魏は江陵を攻め、ここに、五十数年間にわたって文化の爛熟を誇った梁王朝は、名実ともに滅び去ってしまった。かくして庾信は、己れの祖国を滅ぼした北朝に心ならずも仕えること二十八年、再び江南の地を踏むことはなかつたのである。この間の彼の心境は、故郷を蹂躪し尽くした敵国に恥もなく仕えるという、まことに節操なき己れを哀れむ気持で貫かれている。

信年始二毛 信、年始めて二毛にして

即逢喪乱 すなはち喪乱に逢う

藐是流離 藐はかにここに流離して

庾信の絶句体詩における文学意識の転換（矢島）

至於暮齒

暮齒に至る

畏南山之雨

南山の雨を畏れて

忽踐秦庭

たちまちに秦庭を踐み

讓東海之浜

東海の浜を讓りて

遂餐周粟

ついに周粟を餐う（「哀江南賦」）

「鬢や髪に白いものが交りはじめた頃、世の乱れに遭遇し、その後の果てしなき流浪の中に、年老いた。昔日君命を奉じて西魏の都長安に使したが、そのまま自分はいついに敵国に仕える身となった」と、伯夷・叔斉の故事を引用しながら、節をまげた自分への慚愧の念を詠んでいる。また「擬詠懷二十七首」中においても、

在死猶可忍

死に在りてはなお忍ぶべし

為辱豈不寬

辱められては豈に寬ならず

古人持此性

古人この性を持して

遂有不能安

ついに安んずるあたはざるあり

「殺されるはめになっても、そんなことぐらいいはまだしも忍ぶことが出来るのだが、恥辱を受けたとなつては、とても安閑としておれるものではない——古人は、この誇り高き心をひたすら堅持していたればこそ、敵に執らえられて安閑としてはおれなかったのだ。」このように、己れを嫌悪しながらも、かつ生きている苦痛を忍ぶ苦し

い心境を詠ったものは、その他の詩賦にも散見している。

我が祖国を滅ぼした憎むべき国において、たとえ高位高官として尊ばれていようと、常に彼の心中には、節をまげた屈辱感に己れを嫌悪しつつ、故郷喪失者としての悲哀感が絶えず底流に横たわり、その押えがたい慟哭は、彼の文学観に著しい転換を与えたことであろう。北朝における彼は、『周書』本伝に、

世宗・高祖、ならびにつねに文学を好み、信、特に恩礼を蒙むる。趙・滕諸王に至りては、周旋款至、布衣の交りのごとき有り。群公の碑誌、あい請託せらるること多し。ただ王褒のみすこぶる信とあい埒しきも、自余の文人は逮ぶもの有るなし。

といい、あるいは滕王適（文帝の子）の「庾子山集序」に、

しばしば上国に聘せられ、特に太祖の知るところとなる。江陵の名士のうち、ただ信のみ。……明帝文を守り、ひとえに引接を加う。武皇（武帝）英主、いよいよあい委寄す。

というなど、庾信が北周において、三代にわたる皇帝、皇子および顯貴より、王褒と共にどれほど厚遇されたかを述べるが、たとえ、このような礼遇があったとはいえ、異朝に仕える恥辱感、それにとりまなう自分自身への嫌悪、憎めども如何ともしがたい絶望感、彼の胸臆に深く内在していたのである。彼は自らを次のように云っている。

楚材称晋用

楚材は晋の用に称ひ

秦臣即趙冠

秦臣は趙冠に即く

離宮延子産

離宮子産を延き

庾信の絶句体詩における文学意識の転換（矢島）

羈旅陳完

羈旅陳完を接す

寓衛非所寓

衛に寓するも寓するところにあらず

安斉独未安

斉に安んずるもひとりいまだ安んぜず

雪泣悲去魯

泣を雪はいて魯を去るを悲しみ

悽然憶相韓

悽然として韓に相たりしを憶う

惟彼窮途慟

彼の窮途に慟なくを惟い

知余行路難

余の行路の難きを知る（擬詠懷二十七首）

もともと、梁臣であつた己れは北周に仕え官職についている。春秋時代の子産や陳完は敵国で高位高官となつたというが、今、自分も周朝より礼遇されている。しかし、いかに礼遇をうけようとも、我が祖国を滅ぼした国である以上、心安んずるところではない。今さらながら、孔子の故郷を去らんとするときの悲しみがしみじみと実感され、父子と共に恩情をうけた江南の地が懐つかしい。昔、阮籍は己れの歩いてゐる道が窮まると慟哭して引き返したというが、現在、自分が置かれてゐる境遇を思うに、もはや如何ともしがたく、ただ阮籍と同じ慟哭があるばかりである。

ところで、彼の心中深く内在する思ひは、果して、己れの祖国を攻め滅ぼした敵国にあるといふことのみに起因するものであろうか。「哀江南賦」などに吐露される、昔日の己れの榮華を追慕する悲愴慷慨の辞は、あまりに傷ましい。だとすると、われわれは、述前の『周書』本伝、あるいは滕王道の彼に対する賛辞をどう理解すべきであらうか。もしこれらの幸福な記述が真実だとするならば、彼には、南朝における自らの榮譽を纏綿として

つづることなど、不必要なはずではなかったか。だのに、昔日を追慕しつづけているということは、われわれに、北朝における自らの境遇を悲しむ思いを吐露したものののように推測させる。それでは、北周における境遇の悲哀とは何か。それを知るためには、まず北周の政策を考察する必要がある。

### 三

西魏の禪讓を受けて建国した北周は、前王朝の北魏が、かつて急激な漢化政策によって東西に分裂したという政治上の欠陥をよく識り、あくまでも、その出身である鮮卑族を中心とする政策を実施した。もともと、この国は東は北斉、北は胡族に圧迫され、かつ物資の乏しい陝西の一隅に孤立していたので、その勢力は最も弱いものであった。そこで建国の祖とされる宇文泰は、漢族の名臣と称される蘇綽と共に富国強兵策をとり、国力の充実をはかった。その代表とされる政策は『周礼』を政治の基準とし、又関中に二十四軍を置いて兵農一致を旨とする府兵制の端を開いたことであった。この結果、国家の組織が一応かたまり、名実ともに北周は絶対君主制を確立したのであった。建国の祖と称される宇文泰について、『周書』文帝紀下は次のようにいう。

太祖は、人を知りて善く任使し、諫に従ふこと流るるがごとく、儒術を崇尚し、政事に明達し、恩信は物を被ひ、よく英豪を駕馭す。一たびこれに見えし者、咸く命を用ひんことを思う。……性は朴素を好み、虚飾を尙ばず。恒に風俗を反して古始に復さんことを以て心と為す。

彼は儒教を崇高し、政治に明かるく、適材適所の方針をとり、その志は風俗を古に復することにあったのである。こうした彼の下に、漢化政策によって漢族の教養を身につけた北魏の名将の子弟が集し、又前述の蘇

縛ら、漢族の名臣が古道をもって導いたので、国内は著しい発展をとげた。宇文泰の死後、一時、代って從兄の宇文護が宰相となり、孝閔帝・明帝の言を抑えて、みずからの権力を恣のままにしたが、次いで即位した武帝は、ただちに彼を殺して親政を行ない、その体制が整うとすぐさま北斉の討伐を開始し、ついに北斉を滅してしまふ。こうして北周の国運は著しく増大したが、次の宣帝ははなはだしき暗君で、専ら遊蕩におぼれてしまった。そこで、ここに抬頭してきたのが、隋の文帝楊堅であった。彼は次第に勢力をのばし、靜帝が立つやその軍事権を自らの手に掌握し、北周朝に見切りをつけた漢族一派に擁立されて靜帝を除き帝位にのぼった。時に紀元五百八十一年、ここに北周は滅び去った。

以上のような北周の政治情勢から判断するに、宮廷で重視せられたのは、あきらかに文人よりも武人であったと考えられる。あるいは又、武功の人にあらずとも、利用価値の多い高貴の出身であるとか、実務に秀でたものが尊重され、庾信のように詩才のみに秀れた者の地位は、必ずしも高いものではなかったのではあるまいか。例えば『周書』干翼伝に、

世宗（明帝）雅に文忠を愛し、麟趾学を立つ。朝に在りて芸業を有するものは、貴賤に限らず皆聴に預らしむ。すなはち蕭擣王褒等に至るまで、卑鄙の徒と同じく学士と為す。

という記述があるが、卑鄙の徒であっても秀才があれば学士として任じたものと考えられる。これは裏を返していえば、北周朝において、文人に対する関心が低いものであったことを物語るとともに、こうした政策面からの実用性の尊重については、庾信と同じく六朝末の代表文人である王褒を例として取り上げてみれば、その間の実情がさらに明らかにならう。梁の元帝の居城であった江陵が西魏の軍に攻められ、王褒は多くの人士と共に浮虜

として西魏の都長安に入った。時の宰相宇文泰は、「呉を平ぐるの利は二陸のみ、いま楚を定むるの功は、群賢ことごとく至る、過ぎたりと謂うべし」(『周書』王褒伝)といつて、彼等の北朝に至つたことを歓迎している。元來、王褒は梁朝における高名の文雅の士であつたが、一方高貴の家柄でもあつたので、政治的にも優遇されて吏部尙書・左僕射まで累遷しており、武帝は姪を褒の妻となし、晉安王綱(簡文帝)は義理の叔父にあたつていた。また元帝が江陵で即位するや、王僧弁の幕僚であつた褒を召し出し、政策における相談役としたこともあつた。このように彼は梁朝の三代の皇帝と緊密な関係があり、また実務面の才も有していたらしく、『周書』本伝にも「褒、器局有り、雅に治体を識り、すでに累世江東に在りて宰相と為る」という記がある。ところで北朝の方にも、一般的風潮として、常に漢族の顯貴の家柄と婚を通じ、社会的な地位を確立しようとする現象がみられる。<sup>(4)</sup>そのことは、同じく『周書』王褒伝に、「太祖……又褒および王克に謂いて曰く『吾は即ち王氏の甥なり。卿等は竝びに吾の舅氏なれば、当に親戚をもつて情となすべく、郷を去るをもつて意に介するなかれ』」といい、この記事によれば、宇文泰も王氏一族と姻戚関係があり、王褒にも北周において厚遇される素地があつたことが、充分に推察できる。北周朝も名門の家柄と関連を持つことに大きな注意を払つていたのであろう。

以上のように、能吏や顯貴の家柄を貴ぶ北周朝において、王褒のような人士は、まさに求められるべきものであつたことであろう。彼はその後も明帝・武帝の二帝に近侍して榮譽があつた。

ところが、庾信は北周朝において政治に関与した記録が本伝に全く見当らず、専ら文人としての才有りという評價がなされているばかりである。南朝における庾信は、『周書』本伝に、

時に肩吾梁の太子中庶子と為り、管記を掌る。東海の徐摛、左衛率と為り、摛の子陵および信、竝に抄選せ

られて学士と為る。父子東宮に在りて禁闈に出入し、恩礼ともに比隆するものなし。既に盛んなる才有り、文竝びに綺艶なり。故に世に号して徐庾体と為す。当時の後進、競ひて相模範とし、一文有るごとに京都伝誦せざるはなし。

と記されているように、晋安王綱が、中大通三年（五三二）の秋、昭明太子の死とともに皇太子となるや、十九才であつた庾信は、父の肩吾、徐摛、その子の陵等と太子に近侍し、非常な恩礼を受けたのである。皇太子として綱が東宮に在つた期間は十八年間であり、その間庾信は地方官の任にあることもあつたが、青年時代の大半は、太子の居する東宮で過ごしたと思われる。そして彼は、皇太子綱を頂点として一世を風靡した宮体詩の詩風に染まり、徐陵とともに徐庾体と称される彼の綺艶なる文は、都下に流行し、多くの人々に伝誦されたという。宮廷サロン文学の主たる文人としての彼の声誉は、いかばかりであつたであろうか。しかし、彼は、侯景の乱が起るや、簡文帝の命を奉じて、迫り来たる賊軍を前に都建康の守備につく。が、安樂の夢をむさぼつた南朝の脆弱な兵力はどうてい侯景の軍には抗しがたく、ついに江陵に敗走のやむなきに至りて、彼の優雅にして得意な時代は、ここに終焉をつけることになる。このように、庾信の前半生は、おおむね榮華に輝いたものであつた。

ところが、北朝に入つてからは、昔日の声誉に適うものは、何物もなかつたと思われる。『周書』王褒伝に、世宗即位するや、篤く文学を好む。時に褒、庾信と才名最も高く、特に親待を加えらる。帝、遊宴するごとに、褒等に命じて詩を賦し談論せしめ、常に左右に在り。

とあるが、これ以外には、彼が皇帝の許で己れの詩才をふるうという記述は見当らないようである。また『周書』本紀に記載される各皇帝の中で、宮廷のサロン文学的雰囲気を構成したであろうと考えられるのは、前述したよ

うに明帝（世宗）のみであって、『周書』本紀に、

帝、寛明仁厚にして、九族を敦睦し、人に君たるの量有り。幼にして学を好みて、群書を博覧し、善く文を属りて、詞彩温麗なり。即位するにおよんで公卿已下文学を有するもの八十余人を麟趾殿に集め、<sup>(5)</sup>經史を刊校せしむ。又衆書を採採し、義農より以来、魏末に訖るまで、叙して「世譜」すべて五十巻をつくる。

と記すように、学問を好む明帝は麟趾殿において、多くの文士たちに經史の刊校をさせたりしている。ただ惜しむべきは、「君人の量有り」と称された帝であったが、宰相宇文護との権力争いに破れて、護に殺され、位にあることわずか二年余に過ぎなかった。

その他、庾信が格別の恩顧を蒙った人は、直接政治にたずさわらぬ皇子たちである。政治に関与しないといふことは、北周の政治徳目である儒教的リゴリズムの影響をほとんど受けない、いわば自由な立場で物を云える位置にあることを意味する。つまり道徳的文学観から隔離された、より自由な文学観を抱き得る可能性をもつ立場にいる人々であった。例えば『周書』本伝に

趙・滕諸王に至りては、周旋款至、布衣の交りのごとき有り。

とあるように、庾信を高く評価してくれたのは、宇文泰の子である趙王招や滕王道の二皇子であった。とくに庾信の作品中「趙王に和する詩」、あるいは「趙王に奉る啓」など、趙王との深い関係を示す詩文は非常に多く、また、「幼にして聰穎、群書を博渉し、文を属るを好む。庾信体を学びて、詞に軽艶多し。」（『周書』本伝）とあることによっても、趙王招がいかに庾信に傾倒したかがわかる。一方、滕王道に関する庾信の作品は、趙王に対するものに較べると非常に少ない。けれど道は、庾信の存命中に彼の詩文を集めて「庾子山集」を編纂している。

こうしたことは、庾信に対する親愛があればこそできることであろう。

ともかく、南朝の名士であった庾信の、北朝における活動は、宮廷を中心とする集団からははずれた、皇子等を主とするところでのみなされたと考えられ、そのことは、宮廷にこそ望みをかける彼にとって、悲しみに耐えないことであつたらう。それでは、あえて庾信文学を拒絶した北周朝の宮廷における文学観とはどのようなものであつたらうか。

#### 四

唐の李延寿は、南北の文学観の相異を次のようにいう。

永明天監の際、太和天保の間に暨んで、洛陽江左、文雅もつとも盛んなるも、彼此の好尚、互に異同有り。

江左は宮商発越して、清綺を貴ぶ。河朔は詞義貞剛にして、氣質を重んず。氣質なれば則ち理その詞に勝り、

清綺なれば則ち文その意に過ぐ。理深きものは時用に便なり、文華なるものは詠歌に宜し。此れ、その南北の詞人の得失の大較なり。<sup>(6)</sup>

北朝においては、実質敦朴で専ら儒家流の道德的リゴリズムの中に、その文学意識は内包されていたのであろう。例えば、『周書』蘇綽伝に「有晉の季より、文章は競いて浮華となり、遂に風俗を成す。太祖その弊を革めんと欲し、魏帝の祭廟に、群臣ことごとく至るに因りて、乃ち綽に命じて大誥をつくりて之を奏行せしむ。……これより後、文筆みな此体に依る。」とあるように、宇文泰は、当時の文章浮華の風を改革しようとして、蘇綽に「大誥」の文を作らせている。つまりこのことは、文は『尚書』の大誥を基準とすべきであることを明らかにしたも

のである。その結果、魏晋以来の駢體を旨とした文章が改められて文辞極めて嚴肅なものになったという。

この蘇綽という人は、南朝風の文辞を厭ったらしく、『周書』の柳慶伝に

尚書蘇綽、慶に謂いて曰く「近代已来、文章華靡なるも、江左に逮びて、いよいよ輕薄にして、洛陽の後進、祖述してやまず。」

とある。こうした蘇綽の言を入れて政を行った宇文泰が、「恒に風俗に反して古始に復さんことをもって心と為す」(前出)と記されるのも当然のことであろう。そして、この文学意識は、それぞれの皇帝に踏襲されていた。すなわち明帝は、麟趾殿に文学者を集めて經史の刊校を行なっている。ただこの人は、多少純文学も愛好したらしく、前述のように王褒伝に、宴遊の際には庾信らを招いて詩賦を作らせたとある。従って本紀にも「善く文を属り、詞彩溫麗なり」と評している。しかし、完全に南朝の風氣に染まることはなかったらしく、「溫麗」という儒家者流な文章觀を加味した評語は、そのことを物語るようである。次の武帝は、長年互に鬭争にあけくれしていた北斉を平定し、大いに国運を高揚したが、「三教の先後を弁積するに、儒教をもつて先と為し、道教これに次ぎ、仏教を後と為す」(『北史』周本紀)といわれるように、その最も志すところは、やはり儒教精神であった。それ故、彼の文学觀も「周氏梁荆を吞併するも、此の風(淫麗の風)関右に扇さかなり。狂簡斐然として俗を成し、流宕して反るを忘れ、取裁するところ無し。高祖(武帝)初めて万機を統べ、つねに斲彫して朴となすを念い、号を発し令を施くに、咸く浮華を去る。」(『隋書』文学伝)と述べるが如く、北方におよんだ南朝文学の浮華の風を改めようとしたのであった。また盧思道は、「後周興亡論」(『文苑英華』七百五十)中で、武帝を「武功有りといえども、いまだ文徳に遅あらず」と批評するが、文学上における改革も儒教的現実主義に則して行なったも

のであろう。次の宣帝は在位わずか二年間であり、前述の盧思道の言を借れば、若年の折は経籍にも親しみ、氣骨ももっていたらしいが、その後素行に難点があり、父の武帝が嚴訓を加えたが、少しも改まらず、帝位にのぼるや耽酒好色のていたらくであったという。

以上のように、北周朝内に流れる伝統はあくまでも実際の生活信条につながる現実主義であり、文学も儒家流の、いわば実用的性格をもつもののみ存在の価値が認められ、政治の実践を優先するという考えが一般的風潮であった。『周書』李昶伝に、

昶、性峻急にして、交遊に雜らず、幼年にしてすでに解<sup>よ</sup>く文を属り、洛下に声有り。……晋公護（宇文護）政を執るに及びて、委任すること旧の如し。昶常に曰く「文章の事、後世に流<sup>つた</sup>ふるに足らず。經邦致治、庶くは古人に及ばんことを」と。故に作るところの文筆、ついに藁草無く、ただ心を政事に留むるのみ。

とあるが、これは、文章で名をあげるより、政治的才腕によって後世に名をとどめることが士としての志であることをいうもので、明らかに現実的な儒教思想にのっとるものである。そうして、この思想は文学の効用をあくまで達意におく考え方に通ずるものである。だから、北周朝においては南朝の綺麗な文学を直接受け入れていく余地がなかったのではないかと考えられる。

以上、第三節・第四節において、北周の政策面より、庾信の置かれた環境を考え、かつ、北周の文学意識の面から、彼の文学が朝廷に認められなかった所以を考察してみた。つまるところ、庾信が青年時代を過ごした江南では、その声誉まことに華やかなものであった。しかし、北周においては、北斉との争いのために富国強兵制が実施され、政治と密接に交錯する面を持たぬ文学は、実際に、政治機構の中心である宮廷主流の人々に、受け入

れられなかったのではないであろうか。このような環境の中で、己れの詩才を賞される機会もなく、また皇帝に近侍してその才を親しまれるという昔日の名声をも失い、主流から全くはずれた立場にあることを自覚したとき、その胸臆に湧きあがる感懐は、悲愴の極みであったことであろう。その思いたるや、まことに激しい慟哭なのである。

そして、又、実践的政策を強力に推進させていった北周朝廷内の文学観は、常に実質を重んずる現実的な儒家流の、いわば倫理的傾向にあるものであった。この現実と、庾信の文学意識とはあきらかに相容れぬ面があったと思われる。そのことを明確に自覚したときに生ずる、耐えがたき痛苦が、そして疎外感が、彼をして過去を語らせ、己れの文学意識——綺靡の風から悲涼へ——の転換をさそう重要な要素になっていると云えるのではないであろうか。

## 五

それでは、文学的に飛躍したという庾信の絶句体の詩における特質について考えてみる。

もともと、この詩形の発生は、古く「白頭吟」や「長干行」などがその原型であろうとされている。そして晋宋の頃より、揚子江流域を中心とする地方で「呉声歌曲」あるいは「西曲」と称される南方民歌として流行し、その内容は男女の愛情をこまやかに謳歌したものである。この民歌の内容と形式とが次第に宮廷、あるいは文人達に吸収され、そして洗練され、文学ジャンルの一形態として独立するようになった。それが六朝末期の齊梁の頃である。けれど、その頃の作品はまだ民歌の影響下にあり、近体絶句詩のような規格の厳しさはなかった。ま

庾信の絶句体詩における文学意識の転換（矢島）

た、梁代に多作されたものはおおむね詠物詩であつて、この絶句体の詩が詠物詩として多作された理由は、すでに前述したが、そうした詠物詩は、例えば、簡文帝の「詠舞」とか「詠藤」と題するように、事柄や事物をそのまま詠む。その場合作者の心情を吐露する欲求はなく、常に客観的な写生を事とするので、創作上の留意点としては、専ら「修辭」が重視される。つまり、字句の巧緻を主眼とするものである。それ故、個性的な文学性に乏しい単調なものとなつた。

ところが、庾信の作品を眺めてみると、これと質的に著しい相異がある。例えば

故人倘思我 故人もし我を思はば

及此平生時 この平生の時におよべ

莫待山陽路 待つことなかれ山陽の路に

空聞吹笛悲 空しく吹笛の悲しきを聞くを（寄徐陵）

かつて、簡文帝に近侍し、文人として互に名声を馳せた徐陵に、「もし親友の誼みとして私を思つて下さるならば、私の命のある間に訪ねてほしい。刑死した替康の旧宅を、親友の向秀が訪れ、その隣人の吹く笛の音に、在りし友を懐い悲しんだというが、その向秀の悲しみに遭う前に訪問してくれるように。」と詠んで送つて、数千里を隔てた旧知を懐かしみ、又心ならずも異朝に仕えて秋鬢を増すばかりの己れのせつなさを嘆き悲しんでいる。

玉関道路遠 玉関 道路遠く

金陵信使疎 金陵 信使疎なり

独下千行涙　ひとり千行の涙を下して

開君万里書　君の万里の書を開かん（寄王琳）

王琳は若い頃から武を好み、元帝に仕えて將軍となり、江陵が陥落した後も梁室に忠誠を尽くしながら、結局は陳のために殺された人であるが、その王琳からの信書は、彼の忍びがたい思郷の念をしばし慰さめてくれるものであった。しかしそれ以上に、旧知の人が命をかけて祖国のために力を尽くしているのに、己れは異朝に節を屈して仕えている慚愧の思いに、彼は慟哭したのである。

陽関万里道　陽関万里の道

不見一人婦　一人として帰るを見ず

惟有河边雁　ただ河辺の雁の

秋来南向飛　秋来れば南に向って飛ぶあるのみ（重別周尚書二首）

西域との国境である陽関から都まで、一人として中国に帰り行くものはない。ただ黄河のほとりの雁だけが秋になって南に向かつて飛び去って行く、と南に帰る雁にことよせて、南に帰りたくも帰れぬ己れの身を悲しむのである。故郷喪失者の悲哀が切々として読者の心を打つようである。

この他、「和庾四」とか「和侃法師三絶」「送周尚書弘正二首」など、望郷の念を述べる詩はもの哀しい。このような絶句体の詩は、すでに客観的な視野に立って作られたものではなく、作者自身のせつない哀愁がこめられている。六朝末までの中国詩の伝統は五言古詩が主流であり、文人たちは古詩においてこそ、その心情を吐露したのであった。それに対して、南朝で隆盛した四句よりなる短詩は、宮廷内あるいは文人会合の席上でなされる

即席の、いわばすさびと云い得るものに過ぎなかった。ところが、庾信はその「すさび」に過ぎなかったものに、文学的な意義を与え、質的に著しい変革をもたらしたのである。

以上、庾信の詩に質的変革を招来した要因について、第二節以降において述べてきたところを、最後にまとめてみよう。

その第一は、前述したように、北周朝において、皇帝を中心とする文学集団の成立がほとんど見て取れないという文学不毛の環境にある。特に、文学を好んだと称される明帝の在位中、その成立が認められぬことはないが〔周書〕王褒伝)、しかし、一年余という在位期間は宮廷文学サロンを形成するには、あまりにも短かい年月であつたし、かつ、伝統として宮廷内を流れる儒家流の文学観から脱皮して、自由に性情を詠うという雰囲気にはなりにくかつた。ところが、元来、庾信は南朝の宮廷サロン文学をささえる著名の文人であつた。従つて、当時の南朝宮廷を中心として、流行した宮体詩風のきらびやかな風潮に染まって、詠物詩を多作したであろうことは、北朝に渡つてからも、しばし南朝風の詩が残っていることから、容易に推測できる。さらにそのことを証明する記述は、彼を愛した趙王招の伝〔周書〕にいう「庾信体を学び、詞に輕豔なるもの多し」であろう。ただ南朝での作品は戦火によってその大半が灰塵に帰し、現存するもの十数首に過ぎない。けれど、今、特に注目すべき点としては、この絶句体詩というものが、宮廷サロンという文人集団の中でこそ始めて、その存在の意義が確立するものであつたといえるものである。そのサロンの成立が、おおむね不可能と考えられる北周朝においては、南朝風の詠物的な詩の存在する意義は、認められていくすべもあまりなかつたと考えられる。その結果、従来、この詩型の持つ遊戯性が次第に消滅の過程をたどり、集団文学としての位置から、孤立の文学へと変遷していくこ

とになったと思われる。つまり、庾信自身の意識をかんがうるに、南朝における栄華に引き較べて、入関後に直面した不遇の念が、彼をしますます孤立の文学へと傾斜させていくことになったのであろう。

第二に、南朝民歌の形式である絶句体の詩に、自らの不遇の念を投入することは、自らの故郷、江南地方への激しい思慕とみることも出来よう。彼の詩中、しばしば南朝民歌（呉声歌曲、あるいは西曲）を詠んだものが散見する。例えば、「奉和趙王」中の「堪聞烏夜啼」という句の「烏夜啼」とは宋代に作られた歌曲で、西曲歌である<sup>(8)</sup>。また「奉和趙王西京路且」中に「楊柳成歌曲」とあるが、この「楊柳」とは、「折楊柳」と題される、元来北朝における歌曲「鼓角横吹曲」中にみえる曲目で、早くから梁朝に伝誦され、宮廷で奏されたものである。さらにまた、「弄琴一首」中の「不見石城樂、惟聞烏噪林」と詠む「石城樂」は、宋代の臧質の作とされ西曲歌として流行した曲であり、<sup>(9)</sup>「烏噪林」とは前述の「烏夜啼」のことという。このように、庾信にとって、江南の地に流行していた歌曲は忘れ得ぬものであり、それらを耳にすると、その心は常に帰れぬ故郷に飛翔していたことであろう。江南を愛慕する彼の心情は、青春時代に耳にした懐しい南方民歌の形式を借りながら、切々として吐露されていく。このことも、彼の絶句体の詩における変革の要因として見ることも出来るのではないであろうか。

## 結 語

北朝における庾信の文学に、根本的な基調として内在する郷関の思いは、サロン文学の遊戯の手段として専ら詠われた絶句体の詩に著しい内面的変革をもたらした。南朝において、狭隘な文学的視野の下で詠まれた絶句体の

庾信の絶句体詩における文学意識の転換（矢島）

詩は、最早や個性の喪失があり、常に「修辭」を旨とする文学性に乏しいものであった。このような風気の益々たる中に青春を過ごし、その著しい影響を一身に受けて、北朝に渡った庾信は、その風土の相異、あるいは己れのおかれた環境から生ずる不遇の念などによって、次第に現実の厳しき姿を認識しはじめ、南朝綺麗の文学観を忘れていったのである。その結果、彼の詠む詩には己れの心情が内包され、そこに個性の回復をわれわれは認める。かくして、精神的深さをもつ文学ジャンルとして、次の時代―特に近体詩として確立していく過程―への先鞭をつけたという点は、何よりも特筆すべきことであろう。この他に、内容面ばかりでなく、作詩における韻律の点でも近体絶句詩に著しい影響を与えている。『梁書』庾肩吾伝には、「簡文帝が皇太子として東宮に在った時、文徳省を開いて学士を招き、その学士には、庾肩吾父子、徐摛父子あるいはその他の著名な文人たちが選ばれた」といい、おそらく庾信も、沈約らより始まるといわれる声韻重視の風潮の中で、ますますその方面の技を磨いたことであろう。例えば、「和侃法師三絶」の

(1) 秦関望楚路、灞岸想江潭、幾人応涙落、看君馬向南

(2) 客遊対歳月、羈旅故情多、近学衡陽雁、秋分俱渡河

(3) 廻首河隄望、眷眷嗟離絶、誰言旧国人、到在他郷別

あるいは「秋日」の

蒼茫望景落、羈旅対窮秋、頼有南国菊、残花足解愁

あるいは「傷往二首」<sup>(10)</sup>などは、平仄関係が近体絶句詩とほぼ合致するものであり、また『唐書』文芸伝(宋之間)に魏の建安より後、江左に迄ぶまで、詩律しばしば変ず。沈約庾信に至りて、音韻を以て相婉附し、属対精密

たり。

とあるのも、多分近体詩の先駆としての庾信に対する評価であるのではないだろうか。（一九六七・一〇・三〇）

〔注1〕 この詠物詩が、簡文帝を中心とする宮体詩につながっていく過程を林田愼之助氏は『南朝放蕩文学論の美意識』（東方学二七）で論述されている。

〔注2〕 小尾郊一氏「中国文学に現われた自然と自然観」（五〇〇頁）

〔注3〕 劉孝綽の「賦得照棋燭刻五分成」という詩題の詩がある。

〔注4〕 岡崎文夫著「魏晋南北朝通史」（六九六頁）

〔注5〕 『隋書』庾季才伝に「武成二年、与王褒庾信同補麟趾学士」とある。

〔注6〕 『北史』文苑伝序。

〔注7〕 藤王適の「庾子山集序」にいう「昔在揚都、有集十四卷、值太清罹乱、百不一存。及到江陵、又有三卷、即重遭軍火、一字無遺。」

〔注8〕 王運熙著「六朝樂府与民歌」（十一頁）

〔注9〕 右に同じ。（十一頁）

〔注10〕 この作品については、近刊、「中国文化叢書」（文学概論）九九頁に、高木正一氏も指摘されている。